

## 宣教協議会 2023 大阪教区参加者の振り返り

司祭バルナバ小林聡

「耳を傾け、個々の物語を大河のように流れさせる」

いくつもの物語に共に耳を傾けた宣教協議会でした。個人的に印象深かったのは、半田ウィリアムズ郁子司祭のチャプレンとしてのお話と、笹森田鶴主教の「公正を水のように、正義を大河のように尽きることなく流れさせよ。」(イザヤ書 5:24)のお話でした。

半田チャプレンは、神様が出会いへと導いておられるということをお話され、自分自身が神様によって押し出されていることへの気づきと励ましを頂きました。自分が行くという意識から、自分は神様によって派遣されているという意識になれることで、肩の力が抜け、神様は何をご用意くださっているのだろうかというワクワクの意識を持つことが出来ることに感謝しています。

また笹森主教の説教は今回の宣教協議会の方向性を示すものであったと思います。個々の物語が聴かれ、その物語が合わさり、その命と公正と正義の物語を流れさせることが私たちの使命であることを再確認しました。

今協議会で、私たち一人ひとりの物語を大切にすることが確認され、それらが聴かれ、つなぎ合わされることを喜び、これからのビジョンとしていきたいと思います。

その意味で、今後も一人ひとりの思いに耳を傾けることを大切にすることが、教会の使命であり、個々の物語を聴くこと自体が宣教の中身であるのだと思いました。やがてその物語は川となり、大河となって、太平で穏やかで安らぎの天の国となることでしょう。

グレース内海紗英子 (川口基督教会)

とても濃い3日間でした。仕事の都合で最終日のみ不参加の形でしたが、それでも大変な情報量の3日間を過ごさせて頂きました。

今回の宣教協議会では『となりびととなるために』というテーマが掲げられていました。そして、そのテーマのなかで『様々な人の声を聞く』ことが目的の1つであったと伺いました。

様々な話を聞くなかで感じたことは多岐に渡りますが、特に印象に残ったことは宣教協働区に関するスピーチの時間です。

現在、日本聖公会のなかで活発に教区同士の合併を見据えた協働が成されているのは

知っていましたが、今回実際に各教区の信徒さんから協働への意欲や活動を聞いたことで、京都教区との合併案否決がいかにかこの流れに乗り損ねたことだったのかを改めて痛感し、より残念に思いました。

宣教協働区に関すること以外にも、3日間を通してキリスト者に向けた多くの課題が示されました。

小さくとも自分の教会を守っていくことや、子ども達の成長を手助けすること。また、カルトやジェンダー差別・貧困などの社会問題まで。キリスト者が考えなければいけない問題は溢れかえっていることを実感しました。

それと同時に、ちっぽけな私1人が携われるのはその中のほんの一部だということも強く感じました。

様々な課題に関わる方々の話を聞く分科会でもテーマごとに5つのグループに分かれたように、1人で全ての課題をこなすことは難しいでしょう。

けれど、私にはできないことが他の人は得意かもしれない。逆に、他の人が取りこぼしたものを私が拾えるかもしれない。1人では手が回らない問題も、そうやって歩いていくことで様々な解決をはかることができると考えました。

働きの方は違っても、共に神さまに向かって歩んでいる者同士だからこそ私たちキリスト者は「協働」を目指すのであって、またそういった人たちが私にとっての「となりびと」となるのではないかと感じました。

これからも、私は自分に与えられた賜物を精一杯活かせるよう、神さまと共に歩いていきたいと思います。

イサク寒河江研司（大阪聖三一教会）

「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」をテーマに、そして、10年の宣教の実りを持ち寄ることを約束に、清里に集められました。

オープニングで、各教会の実りブースが披露され、観覧の時間が与えられ、集まってきたメンバーの親睦の時間になりました。各教区とも、盛沢山の実りの紹介で10年間の活発な伝道活動を感じ取ることが出来ました。とくに、嬉しい実りだけではなく悲しいこと、残念なことなども実りとして紹介されていたことが印象に残りました。

この協議会の最初のメッセージなどを聞く中で、「耳を傾けること、聞くことを大切に」を自分のテーマに決めて協議会に臨みました。

まず、3教会からのメッセージを聞き、少ない信徒でもそれぞれが喜びをもって役割を分担して教会を閉じることなく礼拝をまもり続けている現状を知ることが出来まし

た。また、高齢を理由に役割から身を引くことはせずに、積極的に自分のできることを見つけて奉仕され、さらに地域との交わり、他教会との協働などを実践されている姿に力をいただきました。

命の現場からのメッセージでは、様々な立場の5人の講師から話を聞きました。その中の病院チャプレンとしてのお話で、戦時中、日本兵に捕虜とされ、ひどい経験をさせられたイギリス人が日本人であるチャプレンと人としての交わりを回復され、赦しの場面があたえられたこと、また、貧困のゆえ路上生活をされている方に支援をされている司祭さまの働きなどを聞くと、出会わされた人、与えられたとなりびとの話に丁寧に耳を傾ける、それもそこに留まって、寄り添って時間をかけて話を聞くことの大切さに気付かされました。

この協議会は、人(となりびと)の話を丁寧に聞くことを最後まで大切にされました。これから出される協議会からのメッセージをもとに今回感じたこと、学んだことを皆さんにお伝えできれば良いと思っています。

ルデヤ中尾由紀子（高槻聖マリヤ教会）

今回参加させていただきました、高槻聖マリヤ教会の中尾由紀子と申します。これまでに大変な労力と時間をかけて、準備してくださいました司祭様・執事様委員会の皆様には心から感謝申し上げます。

初めての清泉寮で緊張もありましたが、一日早く一人で帰る私には、無事に大阪に戻れるかどうかの心配で一杯でした。しかし清泉寮に到着し、プログラムが始まると私の懸念は薄れていきました。それは、顔見知りの方々との再会や又、違う教区の方々との交流が不安を取り除いてくれたようでした。主題聖句の「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である～」のとおり、遠くに離れていても私たちは、主によってつながっていると実感したからです。

本当にしっかりとした企画とスケジュールがなされ、貴重なお話とそれに伴う発見がありました。特に、私たちのあゆみ～物語を聴くのプログラムは、心動かされるものでした。離島や人口減少地域にある小さな教会で、少人数の信徒が頑張って教会を支えている物語です。

沖縄教区屋我地聖ルカ教会の一人のお母さんと3兄弟、九州教区巖原聖ヨハネ教会の柱となっている信徒3名、超高齢化が目に見える東北教区大館聖パウロ教会。共通して言えることは、たとえ一人でも礼拝を捧げ、教会の扉を閉めることが無いように祈るということでした。

私は、教区内の合併をすすめるべきだと考えていました。しかし、プログラムを聴い

てから何か他にいいアイデア、案がないだろうかと思いました。会計の奉仕をよくしますので、どうしても収支のことを考えてしまいます。その考えの中には神さまはおられないと思います。

巖原聖ヨハネ教会の会計の方は、交代の方がおらず30年近く会計を担当され苦勞されています。

私どもの教会と同じく分担金を収める苦勞がありますが、不思議と12月には収められると話され、神さまのみ恵を感じますと話されていたことが、とても心に残りました。これからの日本聖公会を考えると、「宣教協働区」と「伝道教区制」を丁寧な牧会のごとく信徒に関心を持ち理解してもらえるように話しかけていくことと、その中で小さくても頑張っている教会のことも忘れないということが必要だと感じた、協議会でした。

司祭ジョイ千松清美

「宣教」について、自分自身があまり積極的に心を向けていないのに、教区の代表として協議会に出席することは重荷になっていました。また10年の実りについても、確かに幾つかの結果を述べることはできますが、このことが神様の御旨であるかどうか、自分では評価することができないと思っていました。正直にいうと、気持ちは重いまま協議会に出席しました。ですから、私が見出して、何を持ち帰るのか、神様の導きはどこにあるのかと心で祈りながら四日間の協議会を過ごしていました。

けれど、私の思い煩いは神様の憐れみと導きによって一掃されました。協議会の総括である“清里からのよびかけ”はまとめることができず、締めくくりが中途半端な状態で解散となったのは、少し心にもやもやが残る結果になりましたが、私自身の心はとても軽やかで楽しみと喜びに満たされて帰ることが出来ました。単純かもしれませんが、協議会中にもった様々な方との会話による交流が私の心を軽くしてくれました。とくにグループシェアリングでのグループの方々との分かち合いで、神様の居られるところ、御心はどこにあるのかを互いに正直に思いを語り合えたことで心に平安と喜びが与えられました。テーマである“いのち尊厳限りないもの～となりびととなること～”に沿った各自の経験からの“いのち”を語り合えたように思います。また共同体としての教会での色々な問題点も分かち合い、解決する難しさも語り合いました。難しいこと、苦勞していることも一緒に語り合うことで消極的ではなく、それでも神様に向き合うことが大切だよと積極的な思いをその場で持ち合ったように思います。また同室の同年代の姉妹との会話は大変楽しく、それぞれの働きを分かち合いながら、これもまた困難さや苦勞話を聞き合うことで励ましを受けました。具体的な内容は個人情報がありますので書くことはできませんが、幼稚園や保育園の関係者が多く、その中で信仰継承やキ

リスト教教育の難しさを語り合い、私にとってはまさか協議会の場でチャプレンとしての自分の立場が問われるとは思わず、大きな情報交換の場となりました。

クララ 篠田茜（聖贖主教会）

宣教協議会に大阪教区のメンバーとしての参加が決まったとき、これは大変、教区に持って帰れるものを期間中に見つけられるだろうか、ほかにもっとふさわしい人がいるのではという思いが何よりも強かったです。それでもメンバーのみなさんと大阪教区のブースの準備などをする中で、少しずつ前向きな気持ちになってきました。

この協議会は、バイブルシェアリングや礼拝、主教会からのメッセージを挟みながら、さまざまな現場からの報告とその分かち合いを中心に組み立てられており、その中から、宣教協働区も含むこれからの日本聖公会の歩む方向を確認するという趣旨だったと思います。

3つのことが「得たもの」として今心に残っています。

一つ目は、信徒数が少なく、地理的にも中心部ではなく、定住する牧師のいない3つの教会の物語です。一見寂しいように見えますが、「教会が一番落ち着く場所」「(教会は)教会のために自分にもできることがあることに喜びを感じ、元気になれる場所」と信徒のみなさんは言われます。「誰にも頼ることができないから自分がしなくては」と意識が変えられ、その姿を見ている家族や近隣の人々が力を貸してくれるようになったことが語られました。また自分の教会だけでなく教区のことにも関心を持ち、他教区の教会と「祈りのパートナーシップ教会」という関係を結んでいることも印象的でした。

今同じような状況の教会は、決して少なくないと思います。「教会に行けばやることがある」「ほかの教会の人たちと交わる」ことが喜びとなる教会は、神さまに喜ばれる教会ではないでしょうか。

二つ目は、幼児教育、信仰とセクシュアリティ、カルト、傾聴と和解、教会の社会活動の5つの現場からのお話を聴いたあとの、上記の物語も併せての分かち合いの時間です。初対面の方も含め信徒、聖職者、男性、女性と入り混じった7人のグループで2日目と3日目に分かち合いをしました。それぞれに教会の現状、自分の教会での働き、恵みに思っていることから、牧師の働き方や信徒、聖職者それぞれの悩みなどが語られました。たぶんどれもがつながっていて切り離せないことです。日本聖公会の未来は明るいと言うのには躊躇せざるを得ない状態であるにも関わらず、わたしたちはまだお互いの物語や、3つの教会と5人の方のお話から、励ましと気づきを得たと語ることに、信仰を同じくしていることの不思議さと温かさ、信

頼を感じる時間でした。

三つ目は、4人部屋での滞在になったことです。基本的に参加者は複数人の部屋であったようですが、

2人は初めて会う他教区の方でした。この協議会で出会わなければ、たぶんほぼ出会うことがなかった方たちとの出会いは、わたしにとっては忘れがたく、もしもそれぞれの教区に行くことがあれば、その方たちの教会にぜひ行ってみたいと思わせるものでした。

教区に持ち帰れるものは何かと考えると、3日目の分かち合いのテーマとなった「2012年の宣教協議会での提言も含めこの10年間に応答できなかったものは何か」を踏まえての「神の招きにどう応えていくか」への返事になると思います。教会、教区、管区で「神と人に仕える」ことが負担ではなく喜びとなる一人ひとりの働き方を構築することを、返事のひとつにしたいと思います。具体的には、協議会での3つの教会と5人の方の物語から得られるものです。

宣教協議会のハンドブックの「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」とある「となりびと」になかなかない弱さを自覚し、でもそうならうと努力する者でありたいと思います。

司祭ヨハネ古澤秀利

11月10日（金）から13日（月）まで、山梨県清里の清泉寮で開催された日本聖公会宣教協議会に出席してきました。宣教協議会は1995年そして2012年に開催されており、今回で三回目です。1995年の宣教協議会では日本聖公会の戦責告白が出されました。この戦責告白は翌年の管区総会で採択決議がなされています。2012年には「日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言」が出され、植松誠首座主教（当時）の呼びかけで十年後に宣教・牧会の実りを持ち寄ることとなりました。今回の宣教協議会はその呼びかけに応じる形で開催された側面もあったようです。

今回の宣教協議会のテーマは「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」でした。そして実行委員会はこの宣教協議会で”聴くこと”と”対話すること”を大切にしよう参加者に呼びかけました。

「他の人に対して敬意を払い、お互いの考えかたの違いを尊重しましょう」や「多様な人がいることを意識し、ジェンダー、年齢、立場、地域性などの違いに敏感になりましょう」との呼びかけ／注意事項がなされました。とても当たり前の呼びかけ／注意事項ではありますが、昨今の社会で軽視されがちな事柄と言えます。

参加者はこのような姿勢でもって4日間を過ごしました。

